

福岡県糟屋郡志免町立志免西小学校講演会

平成 25 年 1 月 9 日

「国際協力と震災交流」



志免西小学校 6 年生：「古川さんは、お金ももらえないのに、自分から仮設校舎を作って、他人に出来ないことをいくつもこなしていた。僕もお金を募金してフィリピンの小学生のために校舎を作ってあげたい」

講演内容：

- ◆ 第一部：親子二代で取り組む国際協力(1971 年～2001 年までの軌跡)
 - 父・古川外男の言葉：「20 歳で志を立て、20 年後に達成。人生は長い」

- ◆ 第二部：震災がもたらした国際交流 (2011、2012 年活動)
 - 人の幸せとは：物が多いことではなく、満足が大きいこと。お金のためではなく、遣り甲斐のために働くこと。世のため、人のために奉仕できること。
 - 「マサヤ・アコ (私は幸せです)」：2012 年米ギャラップ社による 148 ヶ国の幸福度調査で、フィリピンが世界一に (最下位：；シンガポール)
 - まとめのメッセージ：
 - 与えることを義務と考えず、与えたいという願いとすること。
 - 日本を発展させた能力 (勤勉さ) を途上国に教え与えていくこと。
 - 途上国も発展し、日本人も心が満たされると、お互いの幸福度が上がる。

- 金、地位、名誉ではなく、心にこみ上げて来る喜びや楽しさを求める。
- 素晴らしい人に出会うのではなく、人間の素晴らしさに出会う。
- 古川勝利の言葉：「ボランティア活動とは自分に出来ることをすることではなく、他人にできない事をする事」

子供達のアンケートまとめ：

「国際協力」プレゼン：アンケート

平成 25 年 1 月 9 日

志免西小学校 6 年生の皆さん

本日は、皆さんに「国際協力体験談」をお話する機会をいただいたことを感謝しています。皆さんの感想をお聞かせください。

1. フィリピンのことは、知っていましたか？

フィリピンのことは、何にも知らなかったけど、先生の話しで、地しんがおきたことは知って古川さんの話しをきいてさらにフィリピンでどのようなことがあまっているのかも分かりました。

2. 今日の写真プレゼンは、どうでしたか？

地しんがおきたときどんなにかいを受けただけ、フィリピンはどのようなところなのか、分かりやすく写真を使っているのは、分かりやすかったです。

3. 国際協力活動に関心ができましたか？

わたしは、日本からフィリピンに思返しかできて、国際協力活動に参加してみたいと思いました。そしていろいろな日本のことをフィリピンの人に教えたりしたいです。

4. 粕屋中央小学校の支援活動をどう思いますか？

粕屋中央小学校の支援活動でフィリピンの役にたつことができたからこの志免西小学校もできると思うからこの学校でも支援活動をしてみたいと思います。そしてフィリピンの人たちに少しでもよくなるようにしたいです。

5. 今日の講師にたずねたいこと、伝えたいこと、等があれば書いて下さい。

今日はフィリピンであったことや国際協力での活動などを色々教えてくださってありがとうございました。
わたしは最初にも知らなかったけど古川さんの話しをきいていろいろなことが分かったので良かったです。

ありがとうございました。

◆ 感想：

- 長年に渡ってボランティア活動をして、皆のためにすることがどれ程皆を助けられるかが今日分かったので、私は他人にできない事をやって行きたいです。
- 古川さんの熱心さがすごく伝わってきて、初めて聞いたのに「協力したい」と思えました。世の中、口ばかりの人がいっぱいいますが、古川さんはそれを実現したので凄いと思います。
- お話を聞いて、進んでそれに取り組む人がいることに驚き、古川さんの様な人がいて日本があるんだと思いました。
- 古川さんが、「これは私の言葉です」と紹介したことが、すごいと思いました。
- 私は国際協力という言葉さえも知りませんでした。古川さんの体験談を聞いて、これからもっと詳しく知ってみたいと思いました。
- フィリピンの子供たちは、あんな所で暮らしているのに、笑顔だったのですごいなあと思いました。

◆ 質問①：フィリピンのことは知っていましたか？

- フィリピンと言う名前は知っていましたが、こんな災害がおき、貧しい国だと言うことは知りませんでした。
- フィリピンのことは全く知りませんでした。古川さんの話を聞いて非常に詳しくその国の事を知ることが出来ました。
- 全然知らず、日本人が米作りを教えたり、日本語を教えたりしに行っているのを全く知らなかったです。

◆ 質問②：写真プレゼンはどうでしたか？

- とても分かり易かったです。説明の仕方、写真を出す順序もよかつたし、具体的だったので、ちゃんと理解できました。
- すごく古川さんが話していることの写真の意味が分かりやすく、色々な世界の出来事が分かった気がしました。

◆ 質問③：国際協力活動に関心が出ましたか？

- もともと私の夢だったので、少しは知っていましたが色々な知識が得られてよかったです。
- 将来の夢がまだ決まっていなかったですが、今日の話聞いて、大きくなったら国際協力で働きたいと思いました。
- JRC 委員会で募金活動をやっているのを見て「何でこんなことをやるの？」と思っていましたが、今日の話聞いて、これからは人の為に役立つことをしたいです。
- 気仙沼や、宮城県で被災した生徒達がフィリピンの復興に協力していたことに感心しました。私も世界の中で困っている人を助けられる人になりたいと思いました。

◆ 質問④：粕屋中央小学校の支援活動をどう思いますか？

- 私が大きくなってフィリピンへ行けたら、粕屋中央小が支援して建てた小学校を訪ねてみたいと思いました。
- すごくよい事だと思います。粕屋中央小の皆を見習わなければならないと思いますし、志免西小学校も人の為に出来ることを考え、支援活動を是非やって行きたいなあと思いました。
- 粕屋中央小で、校舎が建てられるほどの募金が集められ、小学生の力でここまで出来るということで、私たちも見習わなければいけないと思いました。
- 粕屋中央小だけでなく、広めていくほうが良いと思います。

◆ 質問⑤：古川さんに聞きたいことは何ですか？

- 国際協力活動をする為に、どの様な事を学べばいいですか？
古川：ボランティアは「先生」ですから、人に教えることができる能力を身につけて下さい。そして、語学よりも世界で日本を説明できる知識を身につけることが大切です。勿論のこと、何にでも喜んで行動する能力を身につけることが第一に求められます。
- 初めてボランティアに行った時、不安はありませんでしたか？
古川：大学を卒業して初めて行ったのがインドネシアですが、英語が通じなくても3ヶ月で現地語を覚え、フィリピンで色々と経験していたので、不安はなかったです。
- 国際協力活動をやめたくなくなった時はありませんでしたか？
古川：自分が主役ですので、ギブアップはありません。古川流の国際協力のやり方を研究、実践しています。
- 何故、フィリピンの人達に東日本大震災のことを伝えようと思ったのですか？
古川：フィリピンは日本から多くのODA(政府開発援助)を受けているので、「今が恩返しをする時だ。国際協力とは必ずしも富んだ国が貧しい国を支援することだけではないはずだから、今度はフィリピンが日本へ国際協力して欲しい」とお願いに行きました。
- 他国の人達に学校を作ってあげるという事を何故始めようと思ったのですか？
古川：地震で校舎が壊れたのでテントで授業をしていましたが、先生が「暑くて子供達が勉強に集中できない」と嘆いていたので、ちゃんとした教室らしい応急校舎が子供達に必要なだ、と思ったからです。
- 生活するお金はどこから持ってくるのですか？
古川：海外の活動では、最初は自分のお金で始めますが、現地で指導した対価として最低限の生活費は得ることができます。私が現在取り組んでいる震災支援活動では、貿易の仕事で得た収入を使っています。自分で稼ぎ、自分で与える、ということです。
- お父さんの決断でフィリピンへ行くのは嫌ではなかったのですか？
古川：「フィリピンへ夏休みに行こう」と連れて行かれ、その後「もう帰らないよ」と言われた時は、何故か嬉しく感じました。お父さんは一家のボスですので、私達は何も

心配しませんでした。

- 色々な支援をして疲れませんか？

古川：お金を求めずに、自主的に志願して実行する「ボランティア活動」はやればやるほど元気に成ります。お金を貯めずに、徳（神様からの護り）を積むからでしょうね。（徳は孤ならず必ず隣あり）

- お父さんが亡くなって、自分を手助けしてくれる人がいなくなった後、「もうやめたい」、「もう、いやだ」などとあきらめた事はありましたか？

古川：いいえ。逆に、それが切っ掛けで父の記念プロジェクトとして、南太平洋にフィジー日本語学校を創りました。

- 初めてフィリピンへ行った時、フィリピンの人達はどんな反応でしたか？

古川：戦後初めて日本人を見たようで、驚いていました。学校では、現地の子供達が珍しい様子で、毎日私達兄弟を見に来ていました。まるで動物園のパンダの様でした（笑）。

- どうやって、フィリピン語を覚えたのですか？

古川：現地の人と話している言葉を聞いて、真似して覚えました。学校の授業は英語で、友だちとはフィリピン語で話します。しかし、英語が分かるようになるのに1年掛かりましたから、2年目から覚えました。

子供達の感想を読んで：

子供達の国際協力活動へ対する素朴な感想に、我が42年間に渡る海外との関わり、そして国際協力での活動実践についてあらためて顧みる気持ちになった。国家が発展したことによって衰退した日本人の心を取り戻すために、この「人は先、私は後」の精神を培うことができる国際協力活動を子供たちに夢とさせることが有効ではなかろうか。私も国際協力で最低限の報酬で過ごした期間が10年ほどあるが、今となってみれば別にどうと言うことはないし、今からでも臨みたいと思っている。仕事をせずに収入がないニートは哀れな人種であるが、奉仕活動で人の数倍働くのは究極の「幸せな人生」である。素直に子供達の意見を理解し、古川家二代で取り組んだこの活動の意義と、次に続く世代へ繋ぐことの勇気を達観する。「開拓こそ我が人生」と60年の人生を全うした父・古川外男を超えたい。